

ダイクシスの性質を持っている指示詞

デシ・エンダー・ウランサリ

1. はじめに

指示詞は、会話や文書の中で何かを指す時よく使われ、コミュニケーションをうまくいかせるために重要なものである。日本語の指示詞は代名詞に含まれ、「コ系」、「ソ系」、「ア系」などの特別な使い分けがある。その使い方は物理的な遠近感覚に影響を受けている。つまり指した物は話し手の存在を中心にしており、そこからどれくらいの距離があるのかという基準で決める。指したものが話し手から近ければ「コ系」を使って、聞き手の近くにあるものは「ソ系」で指し、両方から遠いものは「ア系」で指す。ちなみに、「ド系」はその指示詞の疑問語を表すものである。

例えば、帽子を指しながら言う、「これは帽子です」と「あれは帽子です」という二つの文は、何か違う感じがするのではないだろうか。その違いを説明すると、指した帽子は話し手から近くにあるのか離れた場所にあるのかということに注意するのが必要である。「これ」は指したものが話し手から近くにある場合で、遠ければ「あれ」になる。しかし、話し手が移動すると、さっきまで使った「これ」を「あれ」で指し、返ってさっきまでの「あれ」を「これ」で指すこともあるであろう。つまり、話し手の存在によって使った指示詞が変わってきて、このような指示詞の使い方を**直示用法**と言う。従って、話し手が言葉を発する現場（**発言現場**）に基づいて会話の内容が変わると言う性質を持っている。この性質が**直示性**とか**ダイクシス**と言われるものである。

表題のダイクシスという言葉はギリシャ語の“deiktikos”に由来して、直接指すすることという意味を持っている言葉である。つまり、話し手や時間、空間、または発言現場によって言及するものが変わるという性質を持っている言葉はダイクシスな特性を持っているという。

というわけで、ダイクシスは指示詞ばかりではない。指示詞以外は例えば{「来る」、「行く」}空間を表す言葉や{「今日」、「明日」、「去年」}時間を表す言葉などがある。その他、人称代名詞の人称1{「わたし」、「ぼく」、「おれ」など}と人称2{「あなた」、「きみ」、「おまえ」など}もダイクシスの性質を持っている。人称3の場合には例えば、{「こいつ」、「そいつ」、「あいつ」など}と指示詞を付け加えた人称代名詞、{「この人」、「その人」、「あの人」など}もダイクシスの性質を持っていると言う。この場合では指示詞が冠詞として役割果たす。ところが、人称の{「かのじょ」、「かれ」など}は

そういう性質を持っていない。

2. ダイクシスの性質を持っている指示詞

会話や文のなかで、指示詞でものを指すのは二つに分ける。指したものが発言現場に存在する場合は**現場指示**と言い、ところがそのものは発言現場ではなく、談話や文章の中に出てくる場合は**文脈指示**と呼ぶ。指示詞それ自体が指すものを持つのではなく、現場や文脈の中にあるものを指す事によってそれ自体の指す対象が決まるという性格を持っている。こうした性格は**代名詞**とも共通するものである。現場指示の場合は「指したものの」そのものを専門書では**指示対象** (object) と呼ぶ。文脈指示の場合は**先行詞** (reference) と呼ぶこともある。ここからは、現場指示を見ていくこととする。

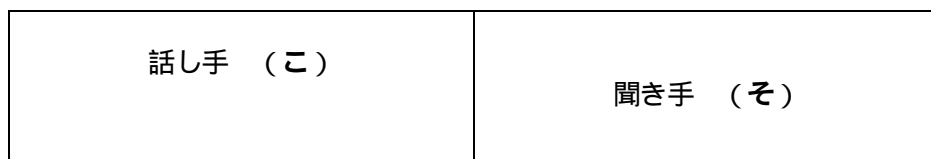
2.1 現場指示

現場指示では二つの使い分けとなって、**対立系**と**融合系**である。話し手と聞き手のいる場所は離れたと考えられる時は対立系という。

- (1) A: それは何ですか。
B: これは本です。

このように、話し手(A)と聞き手(B)が使った指示詞は違っている。この場合では、指した物は聞き手の領域にあるので、話し手は「それ」を使った(図)。

(あ)



(あ)

図 1

一方、融合系というのは、話し手と聞き手は両方とも同じ場所にいると考えられる時や聞き手が存在をしない場合である。例えば、タクシーの運転手に「そこで止めてください。」と言った時は話し手と聞き手(タクシーの運転手)が同じ場所にいると考えられる

(図 2)

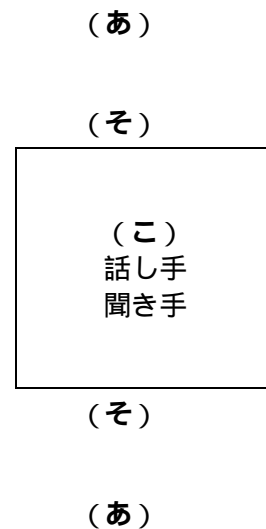


図 2

伴って、現場指示の指し方について二つに分かれていて、**身振り指示(gestural)**と**象徴的な指示(symbolic)**。手で指すこととか、動作で何かを指す時身振り指示と言うのである。こういう場合は以上の例のようである。

(2) (カメラ屋さんで) すみません。 あのカメラを見せてください。

と欲しいカメラを指しながら言う。

ところが、何も動作をせず何かを指す時は象徴的な指示という。こういうタイプは電話で話す時とか手紙のなかでよくあるものだ。話し手の方は「こちら」で表し、相手の方は「そちら」で指すのである。

(3) (手紙のなか) こちらはみんな元気になっています。 そちらはいかがですか。

直示用法は主に身振り (gestural) で指示対象を指すものである。しかし、指し方については必ずしも手で指すことだけではなく、見ることや触れることや対象を振り向くことなどの動作は身振りとも言える。一方、電話での話や手紙の中では常に象徴的 (symbolic) である。これは、話し手と聞き手は同じ場所に存在をしないからである。それで、身振りで表す必要はなくなるわけである。

2.2 文脈指示

文脈指示についての話は、次のよう点に基づいて考えよう。

文脈指示の種類

3. 対話における文脈指示（聞き手の存在が問題となる場合）
4. 文章における文脈指示（聞き手の存在が問題とならない場合）

文脈指示に関わるその他の問題

5. 指すものを受けるときの形
6. 指すものが後から得てくる場合

(4) A: 家の近くに新しいレストランができたんです。今度そこに行ってみませんか？

B: そのレストランの料理っておいしいですか？

(5) (一週間後) A: 先週行ったレストラン、あそこおいしかったですね。

B: そうですね。今度またあそこに行きましょうね。

以上に挙げた例はみんな聞き手が存在する対話における文脈指示である。このような場合では話し手と聞き手に直接知っているものは「ア系」で指し、そうでないものは「ソ系」で指すのである。

そして、聞き手の存在は問題とならない「独り言」の場合は「ア系」が使われる。

(6) あのレストランの料理おいしかったな。

さて、文章における文脈指示で基本ときには「ソ系」と「コ系」が主に使われて、「ア系」は使われない。

ついでにいうと、以上で挙げた例のように文脈指示では指すものが指示詞より先に現れるのが普通である。こうした用法を**前方照応** (anaphoric) と言う。一方、指すものが指示詞より後から現れる用法を**後方照応** (cataphoric) という。

以上に説明した文脈指示は指したものは必ずしも発言現場にあるわけではないので直示用法の性質を持たず、**直示性**とか**ダイクシス**とは言えない。なぜかという、ダイクシスというのは常に話し手を自己中心するので動的で物理的な遠近感覚性質を持って、話し手の発言現場によって使った指示詞が変わるからである。ところが、文脈指示で使った指示詞は話し手を中心するのではなくて遠近感覚とも関係なく、ただ先行するものを再び表すだけである。

3. 終わりに

ダイクシスというのは直接指することという意味で、つまり話し手の発言現場が発せられる場面の中で、時間的、空間的性質に直接言及する言語の特性を指した言葉はダイクシスの性質を持っているということである。それでダイクシスは常に話し手の存在を中心にして、話し手の発言現場を基準していて、それによって話しの内容も変わる。指示詞の場合では動的で物理的な遠近感覚に影響を受けている。指示詞以外のダイクシス、例えば {「来る」, 「行く」, 「今日」, 「今年」など} は静的で物理的な遠近感覚に影響を受けている。

参考文献

- 国立国語研究所 (1981) 「日本語の指示」国立国語研究所出版
中西久美子、山田敏弘 (2000) 「日本語文法ハンドブック」スリーエーネットワーク
庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 (2002) 「中級を教えるための日本語文法ハンドブック」株式会社スリーエーネットワーク
定延俊之 (1999) 「よく分かる日本語学」株式会社アルク